View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tokushima University Institutional Repository

研究論文

ＦＤ活動としての徳島大学教育カンファレンス
－教育的価値の視点による考察－

川 野　卓 二
（徳島大学 大学開放実践センター）

要約：本論では，高等教育における教育的価値について考察した。大学の教育理念に表明されている教育的価値は，教育内容や教育方法も含めて大学内で行われるすべての活動を方向づける影響力を持っている。年度末に実施されている教育カンファレンスで発表される研究内容は，大学が教育を通じて重要視している教育的価値領域を示唆している。これまでの徳島大学教育カンファレンスでの発表内容から発表教員の多くが学生の独創性や体験による学習を重視していることが伺われた。大学での最初の２年間に学ぶ共通教育科目において，学生が学び方を学ぶことがもっと強調されなければならない。
（キーワード：高等教育の価値，教育カンファレンス，FD 活動，学び方を学ぶ）

Faculty Development Activities in Education Conference, the University of Tokushima
－ A Study from a point of view of the Values of Education －

KAWANO, Takuji
（Center for University Extension, the University of Tokushima）

Abstract : This article examines the educational values of higher education. Those values expressed in the university's mission statements drive our decision making about almost everything we do in the university, including what we teach as well as how we teach. Education conference held at the end of year can be a place the intended values of university education reveal themselves through the contents of presented papers. The contents of Tokushima University education conference revealed that many instructors valued student's creativity and experience in their teaching. Students' learning how to learn should receive a central focus in general education during first couple years of university life.
(Key words: Values of higher education, education conference, FD activities, & learning how to learn.)

１．はじめに

徳島大学の創立 50 周年の際，当時の学長であった齋藤史郎前学長は，『徳大広報』のインタビューに答える中で，「･･･徳島大学の学生にいかに付加価値をつけて卒業させるか，･･･ということが教育面での一つの目標に」[(1)] なると述べている。大学で行っている教育活動は，文化や技術・技能だけでなく，価値の伝承活動として捉える視点が重要である。徳島大学では，その法人化後の第一期基本計画のなかで，大学は「長期的な視野に立って人を育み，いかなる時代にも価値を持つ知を創造し次の時代に受け継ぐ使命を負う」[(2)] としている。しかし，残念なことに，基本計画の本文に記された「価値」は，大学における研究活動の成果によってもたらされる「価値」，および「学生のもつ多様な価値観」について言及する際にのみ使用されており，本学として学生にどのような付加価値をつけようとしているのかは明言されていない。

大学は，その教育活動において達成しようとしていることを理念・目標として公にしている。徳島大学の理念・目標は，「自主と自律の精神に基づき，真理の探究と知の創造に努め，卓越した学術及び文化を継承し，世界に開かれた大学として，豊かで健全な未来社会の実現に貢献する」[(3)] とされている。特に，教育面では，「本学は，明日を目指す学生の多様な個性を尊重して，人間性に富む人格の形成を促す教育を行い，優れた専門的能力と，自立して未来社会

の諸問題に立ち向かう，進取の気風を身につけた人材の育成に努める」[3] と記されている。

本論文では，大学が高等教育機関としてどのような価値を追求しようとしているのか考察し，徳島大学においてＦＤ活動の一環として行われている教育カンファレンスの発表に現れた徳島大学が追求している価値を整理することを目的とする。

２．大学教育の目的

学校教育法第 83 条には，「大学は，学術の中心として，広く知識を授けるとともに，深く専門の学芸を教授研究し，知的，道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とある。また，その第２項に，「大学は，その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」とある。一般に大学は，教育や学術研究の最高機関として位置づけられ，国の最高学府となっている。初等，中等教育と受けてきた教育の上に，その後の職業生活につながる専門能力を身につけるための専門教育が置かれている。

大学で行われている活動は，広く知識を授ける教育活動と，深く専門の学芸を教授研究する研究活動，そして，その成果を社会に提供し，その発展に寄与する社会貢献活動として理解できる。これらの活動目的を達成するための方略を各学部のカリキュラムの中に盛り込み，それぞれの学科や専攻で重点を置く場所が異なっている。その違いがそれぞれの学科コースの追求する価値の差異を反映していると考えられる。

３．高等教育と価値追求

高等教育においてなされている様々な事柄を通じて何を具現化しようとしているのだろうか。Clark（1983）[4] は，高等教育は次の４つの価値を追求していると述べている（図１）。第一に挙げられることは，卓越性・優秀さの追求である。つまり，能力や品質の高さを追求している。例えば，世界的な貧困や経済危機を解決することができる優秀な経済学者が必要であり，有能な外科医が養成されていなければ安心して手術室に入ることもできないであろう。この優秀さの定義は，各学問領域によって異なっている。次に，高等教育の公平性・公正性という価値が求められる。この側面では社会的正義が行動に移され，教育へのアクセスの機会均等が望まれている。また，学生の達成状態を同一の基準を用いて評価する側面も含まれている。その意味では，正義は常に平等を要求していると言える。

第三の価値の側面は，研究の自由，教育の自由，学習の自由に関わる側面である。この価値側面は，行動の自由がその根底に存在し，選択の多様性や革新，批評の自由が存在することで確認できる。選択の自由が保障されることによって，学生を含めて教育に関わるすべての当事者はアカウンタビリティを引き受けることになる。高等教育が追求する第四の価値側面として，特定の体制の維持や国づくりのために社会基盤やコミュニケーションネットワークの構築による文化的な統一性を促進することが挙げられる。地域や社会からの要請に耳を傾けたり，その時の教育関連省庁からの要求に応えたりしようとするときにこの価値側面が重視されていることが理解できる。この側面が強調された場合は，ある体制に対する政治的な忠誠という意味合いが強くなる。

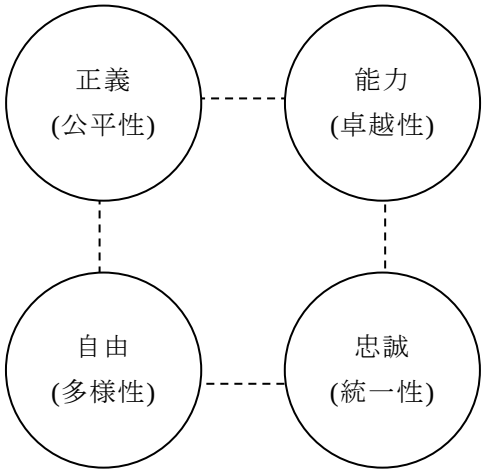

図１． 高等教育が追求する価値(Clark, 1983)

これらの価値を並べてみると，お互いに相反する側面を持ち合わせており，すべてを同時に満たすのは難しいことが容易に想像できる。たとえば，公平性を追求した場合，入学資格を設けず，大量の入学者を迎えることに価値をおくことになる。また，同一基準での卒業認定を行うことになる。しかし，卓越性の追求に重きが置かれると最初から選別がなされ，学生の達成度評価が求められることになる。

自由という教育価値の追求が強調されてくると，他の価値側面の追求との間で摩擦が生じることがある。すなわち，公平性の側面では，すべての学部にまたがってそれ相応の負担を同等にしようということになる。また，優秀さの追求に価値を置こうとするときでも統一された基準を設定し，それを標準として入学や卒業の判断，単位認定の可否判断に用いる状況が生まれる。しかし，これらのそれ相応の公平な負担や標準を求める状況は自由の価値追求によって選択肢を最大限に確保しようとしたり，多様性を重んじたりする側面とは相いれないものである。ある特定の体制への忠誠という価値側面も，他の三つの価値側面との間で摩擦を生じさせることも容易に理解できる。

４つの価値側面間で生じる摩擦について考えてきたが，それぞれの価値側面内で生じる摩擦も忘れてはならない。優秀さという価値側面においては，それぞれの学科コースで様々な能力を追求していることが多いため，それらの間に衝突が生じることになる。つまり，理系コースが求める能力と文系コースが求めている能力は異なっており，同一のカリキュラムを導入することは困難である。また，自由の価値側面でも，様々な自由が存在することが知られているが，それら様々な自由が軋轢を生じさせている状況をよく目にする。例えば，教授の自由や表現の自由と経済的自由権の一つである知的財産権（特に著作権）との間の問題は大学内でよく見られる。公平性・公正性という価値側面においても状況は同じである。つまり，それぞれの立場によって公平さの捉え方が異なる場合が多く，時と場合に応じて様々な公平さが主張されることになる。そして，それはほとんどの場合，自分の置かれている立場から見た公平性・公正性の主張である。そのため，少数グループに属する側から主張される公平性・公正性がしばしば省みられない状況がある。忠誠という価値側面についても，様々な要求や期待が同時に多岐にわたってなされ，他の価値側面と同じ状況が存在している。

このように，高等教育において追求している価値それ自体が多様であり，それらの間で衝突が生じたり，ある価値側面内にあっても摩擦が存在したりしているのが現状である。また，教育活動に関与するそれぞれの参加者も，それらの価値に対する多様な価値観を抱いていることから，教育現場において直接的に価値と関わることを意図的に避けることによってこの問題に直面することを回避しようとする傾向が強いと考えられる。この価値の多様性と多様な価値観の存在によって生じている教育現場の混乱をどのようにして鎮めることができるのかを考えることは，これからのFD活動の重要な課題と言える。

しかし，実際には，高等教育の現場ではこれまでに上に述べた混乱に対応するための手立てを様々な形で講じてきている。まず，多様な価値の同時存在を許す組織が必要である。その点，大学はそれぞれの学部や学科の単位ごとに，ある程度の自治が許されている環境がある。各学部や学科は独自の価値を追求することができるので，独自の文化が育つことになる。また，さまざまな授業科目のカリキュラム内での役割が異なっていることも重要である。教養科目なのか，専門科目なのか，講義科目なのか，実習科目なのか等々で，それぞれの科目が追求している価値が異なっていることが多い。同じ大学内の学部か大学院かという違いも追求する価値側面の差異に影響を及ぼす。

大学間の差異も，その大学が追求する価値側面に違いをもたらしている。短期大学か４年生大学か，また，単科大学か総合大学かという違いもある。博士前期課程（修士課程）のみの大学院課程しかないのか，それとも博士後期課程

もあるのかといった違いも重要である。

大学に存在すると考えられている自治は，学問の自由と教育の自由の根底をなすものとして重視されている。政治的権力・経済的圧力・宗教的権威などから独立して研究や教育を自主的に遂行するための要件である。大学のような，他の組織に比べて縛りが緩やかな組織では，多様な価値を包含したまま内部に対立を孕んだ状態で存在することが可能である。これは，大学が抱える矛盾ではなく，大学が持つ望ましい特徴として理解することが重要となる。

このような状況が正しく理解された場合，大学として学生への情報提供の中でもっとも重要な情報は，どのような価値追求がそれぞれの大学，学部，学科でなされているのか，また，可能なのかを明確に示すことではないだろうか。ただ単にどのような科目を学ぶのかを羅列している履修科目表の提示だけでは，学生にとって有益な情報とはならない。また，教員にとっても，それぞれの学科コースがどのような価値追求を意図したものなのかが明らかにされていることで，授業科目を担当するように任された時に，適切な授業内容，授業方法の選択を行うことが容易になる。

４．他大学での価値教育

大学としては，さまざまな教育価値のリストの中から，組織的な取り組みを推進するために柱となる価値群を明らかにすることが望まれる。金沢工業大学は，その組織的な取り組みを軸にして2007年度の特色GP校に選定されている。

「勉強する大学もある」との見出しで，金沢工業大学の取り組みが紹介された記事が昭和52年７月６日の読売新聞に掲載されている。金沢工業大学では，大学の価値は，大学４年間に学生が身につけた「教育付加価値」の大きさにあると考え，「教育付加価値日本一」を目指す取り組みを長年行っている。同大学は，学園共同体の行動規範と共有すべき価値群を“KIT-IDEALS”として以下のように定め，推進している。[5] 即ち，

K：Kindness of Heart（思いやりの心）
I：Intellectual Curiosity（知的好奇心）
T：Team Spirit（共同と共創の精神）
I：Integrity（誠実）
D：Diligence（勤勉）
E：Energy（活力）
A：Autonomy（自律）
L：Leadership（リーダーシップ）
S：Self-Realization（自己実現）

がそれである。これらの価値の中で，最初の３つ（K：「素直，感謝，謙虚」，I：「情熱，自信，信念」，T：「主体性，独創性，柔軟性」）は，組織の価値に関連するものとして提示されており，学びの場としての大学において具現化しようと努力している。また，残りの６つの価値（IDEALS）は，個人の価値として意識し，共有することが目指されており，大学として，知識や技能だけの教育にとどまらず，社会に適応できるための「人間力」の醸成を目指している。大学としてどのような価値群を組織的に追求していくのか，また，個人的に追求させたい価値側面はどれかを明文化しておくことは学生にとっても教員にとっても非常に望ましいことだといえる。

鳥取大学では，その教育グランドデザイン（大綱）[6] の第一に，「人間力を根底においた教育」によって教養豊かな人材を育成することを挙げ，「人間力」を，「知力」，「実践力」，「気力」，「体力」及び「コミュニケーション力」の５つの構成要素からなる総合的かつ人格的能力として定義[7] している。これら５つの構成要素は，次のように細分化されている。

「知力」：論理的分析力，総合的判断力，創造力，発想力
「実践力」：行動力，リーダーシップ，経験力
「気力」：バイタリティー，チャレンジ精神
「体力」：持続力，適応力，自己コントロール力
「コミュニケーション力」：共感的理解力，受容力，プレゼンテーション力

これらの「人間力」を向上させることによっ

て，卒業後は，「豊かな教養と専門知識を兼ね備えた行動力溢れる有為な人材として，職場・地域の活性化及び人間性豊かな社会の建設に向けて貢献する」ことが期待されている。

経済産業省は，今後の我が国の経済を担う人材の確保・育成という観点から，職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」[(8)] と呼び，それらの能力を「前に踏み出す力：主体性，働きかけ力，実行力」，「考え抜く力：課題発見力，計画力，想像力」，「チームで働く力：発言力，傾聴力，柔軟力，情況把握力，規律性，ストレスコントロール力」の３つの能力に整理している。そして，これらの能力を育成するために課題解決型授業の採用を呼びかけている。

上に挙げた例は，いずれも能力的側面における価値追求として分類されるものである。ここで能力として捉えられているものが，従来の知的能力だけでなく，技能・実践力や態度に関わる側面をも含めた能力として幅広く捉えられていることを見逃してはならない。つまり，「Head」，「Hands」，そして「Heart」の統合された能力が大学教育を通じて追求されていることが理解できる。その他の価値側面（自由，正義，忠誠）に対する大学教育の取り組みは，現状では残念ながらあまり見られない。

５．徳島大学教育カンファレンスに見る価値

大学における教育の質の向上を目指して FD 活動を行っている大学が多く，大学院や学部 FD の義務化がその活動推進に拍車をかけているのが現状である。徳島大学においても 2002 年度から全学 FD 推進プログラムを実施している。このプログラムでは，新任教員を対象とした一泊二日の研修，そしてそれと同時に各学部の教務委員，FD 専門委員が集まり開催する FD リーダーワークショップ等がある。大学教員の教育力向上を目的として，個人に対する取り組みと学部や学科等の組織に対する取り組みとがある。2005 年度からは，第二期（2005-2007）の全学 FD 推進プログラムの一環として，教育カンファレンスを開催している。その中で，徳島大学で行われている教育改善の先駆的な取り組みを学内教員で共有することを目的に，口頭発表やポスター発表，ワークショップなどが行われている。

教育カンファレンスは，FD の義務化を外からの脅威として受け止め，それに対応する策として企画実施された FD 活動ではないので，徳島大学の教育活動に対する主体的な価値表明の機会となる。教員が自らの教育活動にどのような価値を持たせているか，徳島大学がその FD 活動においてどのような価値を追求しているのかを具体的にみるために，学内で行われている教育カンファレンスの発表内容に注目し，その発表から伺える価値を整理することは意義があると思われる。

徳島大学では，これまで，2006 年，2007 年 3 月と 2008 年１月の計３回，教育カンファレンスを開催している。この３回で合計 78 件の発表があった。それぞれの発表件数は表１の通りである。

表 1.　教育カンファレンス発表件数

	第１回	*第２回*	*第３回*
口頭発表	12	15	16*
ﾎﾟｽﾀｰ発表	13	9	12
ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ	－	1	－

*）他大学からの発表１件と実演を伴う発表１件を含む。

この他，第１回教育カンファレンスでは，米国コネチカット大学の Keith Barker 教授を招き，「教員の学習共同体による教育の質改善」と題した講演会を開催した。教員が共同体を組織し，それぞれの領域でＦＤを進めるヒントを伺った。第２回のカンファレンスは，京都大学高等教育研究開発推進センターの大塚雄作教授による「大学評価と教育活動 －授業改善と成果主義の狭間で」と題した特別講演を開催し，大学が評価される時代に，教育活動の成果をどのように大学評価につなげるかの示唆を受けた。また，本年度実施した第３回カンファレンスでは，アルー株式会社の君島浩氏より，「大

学教育をデザインする～企業人の発想～」と題した特別講演を受けた。民間企業，及び防衛省での実務経験を基にして，徳島大学の FD 活動改善への提言を頂いた。来年度から始まる第３期 FD 推進プログラムの方向性について多くの示唆を得ることができた。

教員によって判断された教育の価値側面を解明する方法として，質問紙法を用いて直接被調査者に尋ねる方法，つまり主観に依存する方法の他に，教育活動に費やされた時間や空間，配分された予算やエネルギーといった客観的な指標による方法がある。後者の視点でこれまでのカンファレンスで行われた発表を眺めてみると，共通教育を対象とした内容のものが 78 件中 45 件と最も多かった。その中でも 2005 年度より開設されている創成学習科目に関わる発表が 15 件あるのが目に付く（表 2）。また，第２期全学ＦＤ推進プログラムの最終年にあたる今年度に実施した第３回のカンファレンスでは，何らかのアンケート調査やテスト結果を基にした発表が目立った。本稿では，最も多くの発表がなされた創成学習科目とアンケート調査を基にした発表について詳しくみることにする。

表 2.　創成学習科目* に関連した発表

第１回 (2006. 3)	*第２回 (2007. 3)*
大橋 他（2006）	大橋 他（2007）
齊藤 他（2006）	齊藤 他（2007）
定森 他（2006）	佐藤（2007）
曽田（2006）	神藤（2007）
英 他（2006a）	田中（2007）
英 他（2006b）	続木 他（2007）
藤澤 他（2006）	伏見（2007）
	山畑 他（2007）

*）2007 年度から共創型学習科目と呼ばれている。

藤澤他（2006）[9] は，その発表の中で，創成学習科目の授業では，①自ら行動する，②体験的な学習方法をとる，③フィールドワークを中心とする，④少人数グループ活動を基本とする，⑤ディスカッションを主体とする，そして⑥プレゼンテーションを行う，の６種類の方法が取り入れられていると述べている。また，創成学習科目が目指す能力（19 項目）を以下のような７群に分類している。

A 群：創造性
- 創造する力　・アイデアを出す力
- 企画（設計）する力

B 群：積極性
- 運営する力　・調査する力
- 行動力

C 群：グループ力
- 指導力　・協調性

D 群：討論＆プレゼンテーション力
- 発言する力　・聞き取り力
- 発表する力

E 群：国語力
- 文章力（表現力）・まとめる力

F 群：論理的センス
- 理解する力　・分析する力
- 考察する力　・完成度を評価する力

G 群：精神面
- 持続力　・集中力

上に述べた６種類の授業方法を組み合わせることにより，19 項目すべての能力と対応をもたせることができると考えられている。

藤澤他（2006）は，後期に開講された５科目を受講した学生に対してアンケートを実施し，これらの能力に関する自己評価を行わせた結果，すべての項目において，その授業の受講前と比較して受講後の学生の自己評価が高くなっていたことを報告している。その中で，「アイデアを出す力」「調査する力」「発表する力」が最も伸びたと感じている割合が高かったが，「運営する力」「指導する力」そして「理解する力」は伸びたと感じた学生の割合が低かった。また，「創造する力」は，学生が最も伸ばしたいと考えていた能力であったが，実際には，伸びたと感じられた割合が平均以下のグループに属するものとなった。「文章力」についても，授業を受講することではあまり伸びなかったと感じられたようである。

創成学習で取り入れられている授業方法と創成学習が目指す能力との間に関連があると言えても，それらの授業方法を用いることによってその授業方法に関連がある能力を必ず伸ばすことができるということではないことを忘れてはならない。それらの能力を持ち合わせていることがその授業方法を実践する時に必要になると考えなければならない。それらの能力を伸ばすためには，学生自身がそれぞれの能力を高めるための方法を理解し，実際に多くの練習を重ね，自己の遂行レベルを常に振りかえることが必要である。つまり，学びに必要な課題が課せられ，そのような活動が授業中になされるだけではそれらの能力を必ずしも伸ばすことには繋がらないのである。

次に，第３回カンファレンスで目立ったアンケート調査やテスト結果を基にした発表について，その価値側面を考えてみたい。まず，テスト結果を分析の対象としている発表が３件あったが，これらの発表では学生の能力に関する側面に価値が置かれていることが容易に理解できる。また，アンケート結果が報告されている発表が 15 件あったが，そのほとんどが学生によるプログラム評価や自己評価であった。学生以外によるプログラム評価に関する発表が２件あったが，学生以外によって学生を評価した発表は抄録の記述だけからではその存在を確認することができなかった。アンケートに使用された質問項目は，履修の感想や教師の授業技術に関するものが中心であった。また，授業前後の意識変化やイメージの変化に関する項目がよく用いられており，コミュニケーション能力や人間関係能力の変化を尋ねる項目も見られた。このことから，これらの能力が教育活動において重視されていると判断できる。

アンケート調査の場合，質問紙法のみでデータ収集を行い，それを基にしてデータ分析を行う方法が一般的であったが，このように一つの方法で集められたデータを分析の対象とするような方法だけでは，方法によるバイアスが存在することが指摘されている。教育の効果を質問紙によって自己評価する際も同様である。特に，社会的望ましさによるバイアスが介入することが多いので，質問紙を使った自己評価以外の方法と組み合わせる複数の方法によるデータ収集が望まれている。学生評価の対象としてもっとも重要なものは学生による学習であり，学習の効果である。ＦＤ活動の評価を行う場合も学生による学習の程度と質，およびその効果の評価が最終的な対象となるべきであり，これからの教育カンファレンスを通じて，ＦＤ活動による学生の学習評価に関する分析結果がもっと共有されるようになることを期待したい。

６．大学教育の価値と学びの価値の教育

大学を最高学府として位置づけ，大学での学びによって学習が完了すると考えてしまうと，４年間という閉じた世界を想定し，その中でもっとも良い答えを授かるために大学に来て学ぶという態度になってしまいがちである。大学で正しいこととして教えられている多くの事柄が，数年後には一般に正しくないと判明しているかもしれない。そうすると，大学で多くの内容を学んだとしても，数年後にはそのほとんどが価値あるものとしては見做されないことになる可能性が高い。

では，大学では何を学ばなければならないのか。大学が学生に与えることができる最も価値あるものは何か。それは，さまざまな問題に対する答ではなく，さまざまな問題を解くために必要な道具を身につけることである。また，解決すべき問題を明確にする能力を身につけることも重要である。Garner [10] は，教育の役割は学生にどのように学ぶかを教えることであると述べている。彼は，最初に，「どのようにコミュニケーションを行うか」を教えること，次に，「学ぶための技術を教える」こと，そして，「知らなければならないことがどの程度存在しているのか」を明らかにすること，最後に，「学びたいという気持ちを持たせる」ことの４領域に分けられると考えている。

大学においては，これら４領域の中では，まず，口頭，もしくは文書によるコミュニケーション技術に磨きをかけることに重点が置かれ

る。質的・量的な記述を行ったり，推論を働かせたり，コミュニケーションによって理解できる状態を作り出すことである。次に，有用な情報源を見つけたり，情報収集の方法，知識を構造化したり，得た知識を利用できるように準備したりする技術を身につけることである。人生で直面する課題を遂行できるように，知識や技術を得るために必要な事柄を勤勉に行うという自制を学ぶことも必要である。

そして，教養課程の段階でできるだけ幅広い領域に関する教育を受けることで，自分がどの程度多くの事柄を知らなければならないのか，つまり，自分がどの程度知らないのかを知ることが大切である。最後に，研究者である教員がそれぞれの学問領域に対して持っている情熱を，それぞれの授業で学生に伝えることを通して，学生に更に学びたいという気持ちを起こさせ，持ち続けさせることも重要である。つまり，学ぶということ自体に価値があるということを体験・体感させることである。

以上の４領域に関する教育が成功した場合，生涯学習社会で目的意識を持って主体的な学習を長期にわたって継続する構成員を養成できたことになる。教育カンファレンスの中でもっともよく発表された創成学習科目では，体験学習や実習，アンケート調査を行ったり，その結果のプレゼンテーションを行ったりすることが多い。これらの学習活動自体が学生に学びを保証するものではなく，それらの活動に意味を持たせる解釈を学生が時間をかけて行うことの積み重ねが学びを体験することに繋がる。どのような活動を授業の中に組み込んでいくかに焦点をあてて授業改善を進めるのではなく，授業中に行う活動が持つ学びの側面を意味づけるための時間をどのようにして授業の中に組み込んでいくかが重要である。

価値の教育において，教師は中立的立場をとって教育活動を行わなければならないという考えもあるが，本来，教育活動は価値観との関係を無視して営むことはできないものである。なぜなら，何を教えるか，どのように教えるかなど全ての側面に，教師の価値観が現れることになり，学生の反応に影響を与えることになる。中立的であろうとすること自体が，教師の価値観を表明していることになっていると言える。そのため，教育活動の実践は，ある価値を擁護した活動として理解されなければならない。

教師は，教育の実践において価値から距離を置いた活動を行うことはできないとすれば，価値に対して教師はどのような態度で臨むべきであろうか。筆者は，教師は自らの教育活動がどのような価値観の表明であるのかを意識しながら携わるべきであり，自らの教育活動が，どのような影響を学生に与えるかを常に意識しながら学生と関わる必要があると考える。

７．今後のFD活動

教師は，どのような影響を学生に与えようとしているのかを考えることなしに，教育活動を行うことはあってはならない。教育的価値の様々な側面の中でどの側面に焦点を当てた教育を学生との共同作業を通じて展開しようとしているのかを常に意識していなければならない。また，その際には，自分の教育哲学を学生に平易な言葉で伝えることができるように準備しておくことが必要である。

これまでのFD活動は，主に授業技術の側面に関するものが多かったように思う。今後は，授業改善のためのFDから，カリキュラム開発や組織開発を含めた教育改善のためのFDに発展することが重要である。また，それが最終的には，学生の学習改善につながるようなFDになることが求められていると思う。そこで，筆者は学生の学習改善のために役立つ「学び方を学ぶ」ことができる科目を共通教育科目として開設し，その授業の効果を検証することを提案したい。教育活動の構成要素として，教育内容，教育方法，教育対象，教育環境，教育者，教育目標などがある。それらの相互関連性を理解したうえで，それぞれの活動の背景としての自らの教育哲学に根ざした教育的価値を追求する教育実践が可能になるような授業を根気強く開講していくことが重要である。また，その効果が学生による学習成果という視点から検証

され,教育カンファレンスがそのような教育実践の成果を共有する場として定着し,「相互研修コーディネート型FD」[11]として機能するようになることを期待している。

【表２.創成学習科目と関わりがあるこれまでの教育カンファレンス発表研究の一部(カンファレンス抄録集より)】

(*)大橋眞，桐山聰，森本啓子，中恵真理子：創成学習 今そこにある課題　ー身近な福祉介護を見て・知って・考えてみるー 今後の課題と展望 - 29，2006.

(*)大橋眞，斎藤隆仁，佐藤高則，中恵真理子，田村貞夫：教養教育と「ものづくり」- 15，2007

(*)齊藤隆仁，佐藤高則，大橋眞，桐山聰：共通教育・創成学習「つたえること」と「ものづくり」- 25，2006.

(*)齊藤隆仁，佐藤高則，大橋眞：創成学習「つたえること」と「ものづくり」- 29，2007.

(*)定森秀夫，中村豊，中原計：平成17年度創成学習「埋もれた文化遺産」 - 45，2006.

(*)佐藤征弥:創成学習における少人数教育と学外活動の試みについて- 41，2007.

(*)神藤貴昭：学生が大学教育を考え，大学を変えるということ―創成学習科目と学生ＷＧより―- 25，2007.

(*)曽田紘二：共通教育・創成学習「大学ってどんなとこ？ー大学での学習探索講座ー」 - 47，2006.

(*)田中俊夫：創成学習「空海と歩く」における歩き遍路体験- 23，2007.

(*)続木章三，英崇夫：「ものづくり」による創造的学習～「ニューコメン機関復元プロジェクト」の活動を通して～- 17，2007.

(*)英崇夫，桐山聰，上田哲史，佐野雅彦，松浦健二，日下一也，大恵俊一郎：５大学教育連携とギガビットネットワーク（ＪＧＮⅡ）による新しい教育の試み - 1，2006.

(*)英崇夫，藤澤正一郎：全学共通教育創成学習「ルーツを探れ」 - 39，2006.

(*)藤澤正一郎，英崇夫：全学共通「創成学習」科目における能力自己評価 - 41，2006.

(*)伏見賢一：創成学習「宇宙を探る」実施報告 - 43，2007.

(*)山畑隆史，吉村崇，石田雄司，大野彰子，森岡真吾，吉田篤司，日下一也，小西正暉，田村貞夫，英崇夫：ソーラーボートプロジェクト - 31，2007.

【注】

(1)徳島大学：『徳大広報 No.97 創立50周年記念特集号』徳島大学広報委員会 1999.

(2)国立大学法人徳島大学：「徳島大学第一期基本計画」徳島大学総務部 2004.

(3)徳島大学の理念・目標 http://www.tokushima-u.ac.jp/article/0010904.html（2007年12月31日現在）.

(4)Clark, Burton R.： *Values in Higher Education: Conflict and Accommodation.* The Wilson Lecture Series: Lecture Two. 1983.

(5)石川憲一：「金沢工業大学における教育改革への取り組み」～知識から知恵に～ 金沢工業大学 http://www.kanazawa-it.ac.jp/about/kyoiku/kaikaku.html(2007年12月1日現在).

(6)鳥取大学:鳥取大学教育グランドデザイン決定！！ http://www.stu.zim.tottori-u.ac.jp/gakumubu/gakumuka02/info/グランドデザイン.pdf（2007年12月1日現在）.

(7)鳥取大学：人間力の考え方 http://glc.office.tottori-u.ac.jp/Syllabus/Ningenryoku/kangaekata.htm（2007年12月1日現在）.

(8)経済産業省：「社会人基礎力」育成のススメ http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf（2007年12月1日現在）.

(9)藤澤正一郎，英崇夫：全学共通「創成学習」科目における能力自己評価 『徳島大学教育カンファレンス発表抄録集』 41，2006.

(10)Garner, Lynn E.： *Learning in an Eternal Context.* BYU Devotional Address, June 5, 2001.

(11)神藤貴昭，川野卓二：全学FDの構造と機能 『大学教育研究ジャーナル』第5号，1－14，2008.